

## アール・ブリュット発信検討委員会（第1回）結果概要（主な意見）

### [アール・ブリュットの先駆者として]

アール・ブリュットにずっと取り組んでいる県は他になく、取組の歴史の蓄積がある滋賀がやっていくことは意義がある。（伊熊委員）

アジアでのアール・ブリュットの取組との連携も考えていけばいい。取組がないなら、滋賀県が働きかけていけばいい。（栗原オブザーバー）

### [アール・ブリュットの抱える課題]

滋賀や京都、大阪でもまだまだアール・ブリュットは知られていない。（保坂委員）

アール・ブリュットは特別な人の作品、という印象。障害者の日常を語る中で文化芸術を位置づける必要があるのではないか。（久保委員）

アール・ブリュットの認知は文化庁内でさえ十分ではない。全国博物館会議や、美術館の会議等でも、アール・ブリュットがテーマになったことはないと思う。アール・ブリュットについて知ってもらうために、現段階では様々な学会や団体、協会などへ働きかけ、協力を依頼するのが効果的。（栗原オブザーバー）

突出した作家を選んでいく（それ以外は切り捨てる）というヨーロッパ的な鑑賞、コレクションの仕方と、障害を持った人を中心とする日本のアール・ブリュットはなじみにくいところがあるのでは。日本的な「アール・ブリュットのあり方」を考えることが重要。（服部委員）

様々な課題を美術という大きな枠組みや歴史の中で再検討、フィードバックして見ることで見えてくることがある。（服部委員）

### [アール・ブリュットの可能性]

アール・ブリュットは、観る側に美術史の知識がなくても感じられる。普通の美術館で見るアート以上の力を秘めており、アール・ブリュットは地域の活性化に有効に機能するのでは。（伊熊委員）

作品の魅力を福祉現場だけにとどめては、障害のある人の自己実現のための手段になり得ない。（北岡委員）

アール・ブリュットや仏教美術という滋賀県の資源を新たな視点で見つめて、「美の滋賀」というコンセプトで再編集されることが、美術館そのもののあり方までも見直すことにつながるのではと期待している。（北岡委員）

このまま障害者のための美術になってしまうと、その内側だけに閉じてしまう危険性も感じる。福祉や芸術の観点だけでなく、アール・ブリュットは観光に関係するかもしれない、産業振興につながるかもしれない、という多義的な視点をこの段階で持つてほしい。（中村委員）